日本のハロウィン今昔物語：明治時代に紹介されたハロウィン

佐々木　隆

プロローグ

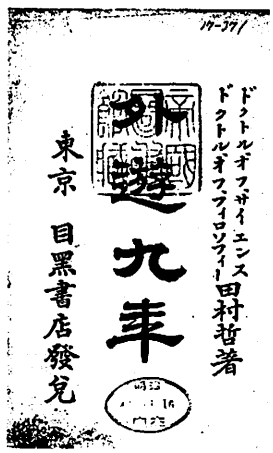
日本のハロウィンがいつ、どのようにして紹介され、根付いたかを明確に紹介することは今のところできない。筆者もこれまでハロウィンについては研究論文等を発表してきたが[1]、そのほとんどはハロウィンをビジネスとして結びつけた受容関係であった。特に1976年にモロゾフがハロウィンを目当てにチョコレートの販売開始、1983年に原宿のキディランドで子どもを中心にしたハロウィンパレードを開催したことは、すでに触れてきた。しかし、更に遡って、日本にハロウィンが伝えられたのは資料的には一体いつなのかを探ってみたい。日本の近代化が本格的に始まった明治時代は、欧風化、文明開化を背景にキリスト教が宗教としてではなく文化として積極的に取り入れられ[2]、早くもクリスマスについては、もみぢ、みどり合作『久里寿満寿』（メソヂスト出版舎、1895年11月）が発表されている。ではハロウィンはどうであろうか。明治時代のハロウィンについて調査を行った。なお、本論では「ハロウィン」の表記を主に使用するが、受容の観点から「ハロウィーン」と表現する内容と混在していることをお断りしておきたい。

1　調査の過程

筆者はこれまで日本のシェイクスピア受容史を研究するために継続的に書誌のリサーチを行ってきた。基礎調査は書誌及び上演年表としてこれまでにも多数出版してきた[3]。さらに現在でも継続的に調査は継続している。

当時の調査の様子[4][5][6]は、まだインターネットが商用化される以前の時代で図書館等での検索方法はいわゆるカード検索であった。2005年以降に江戸時代からの日本におけるシェイクスピア受容について、資料の調査を本格的に行った。しかし、それは単なる書名やキーワードによる調査では対応できなかった。そこで明治時代について留学や海外での体験談をまとめた滞在記、旅行記等の記録的なものへと対象を広げた。金尾種次郎『川上音二郎欧米漫遊記』（金尾文淵堂、1901年2月）はその代表的なものだ[7]。川上音二郎は自由民権運動でも知られると同時に演劇界でも貞奴と共にその名は知られていることから、当然シェイクスピアの関連は高い確率で言及している、あるいは論じている可能性があることは予想がつくことだ。こうした資料は国立国会図書館のデジタルデータ化されたものがデジタルコレクションとしてインターネットを経由で閲覧することができる。著作権の権利がなくなったからだ。しかし、書名では判断できないため、そこから目次を検索し、さらに内容を確認しなければわかない資料もある。警察の捜査のような資料調査の末たどり着いたのが、田村哲『外遊九年』（目黒書店、1908年11月）である[8]。目次には「三六　欧米の演劇」

とあり、そこにはシェイクスピア劇上演の観劇の様子が記されていた。田村哲『外遊九年』に出くわしたのは明治時代のシェイクスピア研究書誌作成の過程の中で見つけた文献である。この文献にいつ辿り着いたのかははっきりしないが、2010年から2011年頃ではなかったかと思われる。というのはこの期間に筆者は国際文化交流・文化外交に関するもの執筆しており、『文化交流から文化外交へ』(イーコン、2010年10月)、『日本文化ブームから文化外交まで』(イーコン、2011年5月)を出版したが、前者では金尾種次郎『川上音二郎欧米漫遊記』について触れておらず、後者の『日本文化ブームから文化外交まで』では明治時代の万国博覧会の記述の中で触れているため、この間に資料調査により新しい資料の内容を反映したことになる。この時の調査で同時に辿りついた可能性が高い。その後、日本のハロウィンの受容に関するものをここ数年取り組んでいたが、もっぱら渋谷のハロウィンのことを分析していたため、史的考察を後回しにしていた。しかし、これまで集めた資料を再度チェックした時に田村哲『外遊九年』のことを思い出し、内容の確認を行い、ハロウィンの記述のあることに改めて気が付いた経緯がある。



つまり、もともとはシェイクスピア書誌作成のための調査で文献には辿りついていたが、ハロウィンの記述については調査対象外であったため、これまで触れる機会がなく、ここ数年のハロウィン研究の中で再度資料の調査を行った際に辿り着いたということだ。

2　田村哲『外遊九年』(1908)

田村哲『外遊九年』(目黒書店、1908年11月)については国立国会図書館デジタルコネクションとしてインターネット公開されているため、それを利用した。目次を見ていくと、「二〇　ハロウィーンの奇習　男女学生の社交機関」がある。さらに内容を読んでいくと、「一六　米国男女学生の社交」でもハロウィーンについての記載がある。全体の目次を紹介すると以下の通りである[9]。

一　吾が外遊前の奮闘 / 1 (0009.jp2)
二　船中の生活と感想、汽車中の失敗 / 8 (0013.jp2)
三　最初の母校『アイオワ州立大学』 / 17 (0017.jp2)
四　第二の母校『コロムビア大学』 / 27 (0022.jp2)
五　新英洲の一年 / 37 (0027.jp2)
六　華盛頓府の四年 / 44 (0031.jp2)
七　米国教育の理想 / 49 (0033.jp2)
八　米国の学校 / 56 (0037.jp2)
九　米国の大学及カレツヂ / 62 (0040.jp2)
一〇　米国諸大学の特色 / 75 (0046.jp2)

一一　米国の学位 / 81 (0049.jp2)
一二　米国に於ける日本学生 / 89 (0053.jp2)
一三　米国大学の奨学金渡米学生の心得 / 95 (0056.jp2)
一四　米国学生気質 / 103 (0060.jp2)
一五　米国学生の夏期生活 / 113 (0065.jp2)
一六　米国に於ける男女学生の社交 / 123 (0070.jp2)
一七　欧米人の公徳心 / 131 (0074.jp2)
一八　欧米の女子 / 139 (0078.jp2)
一九　米国女子大学の側面観 / 147 (0082.jp2)
二〇　ハロウィンの奇習『男女学生の社交機関』 / 154 (0086.jp2)
二一　欧羅巴の学風 / 159 (0088.jp2)
二二　米国の富豪と大学 / 172 (0095.jp2)
二三　欧米学界の中心『カーネギー、インステチユーシヨン』の現状 / 178 (0098.jp2)
二四　天気山『高層気象研究の機関』 / 188 (0103.jp2)
二五　大統領ローズベルト氏と握手したる時の感想 / 196 (0107.jp2)
二六　老偉人『ヘール』 / 202 (0110.jp2)
二七　盲唖婦人ケラー嬢の奮闘 / 206 (0112.jp2)
二八　高峰博士『米国に於ける日本人の代表者』 / 208 (0116.jp2)
二九　華盛頓府の街上にて同郷人と睨み合ふ / 220 (0119.jp2)
三〇　ナイアガラ瀑畔の一日 / 226 (0122.jp2)
三一　ホドソン河畔『大紐育の仙郷』 / 235 (0126.jp2)
三二　紐育の現在、紐育人の非常識 / 245 (0131.jp2)
三三　暮斯頓府、予の三日労働 / 250 (0134.jp2)
三四　華盛頓府、学者の交際振り / 258 (0138.jp2)
三五　瑞西紀行、ジエネワ湖上の感 / 266 (0142.jp2)
三六　欧米の演劇 / 275 (0146.jp2)
三七　ロツキー山上の朝 / 284 (0151.jp2)
三八　吾が帰朝の動機 / 290 (0154.jp2)

スラッシュ以降は頁とカッコ内はデータのコマ番号である。あまり漢字表記で見かけないが、「暮斯頓府」は「ボストン」のようだ。通常は「波士敦」と表記するようであるが、田村は「暮斯頓府」を用いている。筆者が最初にリサーチしたのは「三六　欧米の演劇」であった。ここにはシェイクスピアに関する記述がある。

まず、筆者は田村哲（1876-1909）については多くの情報を持ちあわせていない。生没年は国立国会図書館の詳細な書誌情報によるものだ。従って『外遊九年』自体からわかる範囲で簡単に辿っていきたい。

（1）表紙

表紙には「ドクトル、オフ、サイエンス」「ドクトル、オフ、フィロソフィー」と著者の肩書が記載されている。それぞれ"Doctor of Science"（理学博士）、"Doctor of Philosophy"（哲学博士）となる。2つの博士の学位を有していることになる。

（2）自序

「自序」より1898年より1906年まで欧米に外遊していたことがわかる。その内訳は以下のようになろう。

最初の5年　1898年から　「大学生時代」[10]
　　アイオワ州立大学の2年
　　コロムビア大学の2年
　　新英洲の1年
後の4年　1903年から　「学界の末席を汚し、聊か活動せる時代」[11]
　　華盛頓府の4年

新英洲とは「ニューイングランド」、華盛頓府とは「ワシントン」のことだ。文中には「而して其の中数ケ月間欧洲に漫遊せることあり」[12]という記載もある。まさに外遊である。家族のことにも触れて、9年の間に赤ん坊であった息子は紅顔の少年に、やんちゃな娘は二十路を越え、妻は四十の分別盛りとの表現がある。

また、4人の恩師についても、ギッブス先生(Prof. Gibbs)、ウッドワード先生(Prof.Woodward)、アッベ先生（Prof.Abbe)、ウエルド先生(Prof.Weld)の名をあげ、そこには感謝の念が記述されている。

田村哲のことを知る記述としては特に以下のものはよいヒントになろう

予が終生の目的は、専問とする気象学と海洋学との研究と普及とにあり[13]。

また、彼の友人等についても助力を得たことへの感謝が次のように記されている。

終りに友人梅澤和軒、五十嵐力の両君、及び中学世界記者西村渚山君が、有益なる助力を與へられたるを謝す[14]。

梅澤和軒（1871 - 1931）は田村と同じ米沢の出身の国文学者、美術評論家である。五十嵐力（1874 - 1947）もまた米沢出身での国文学者である。このふたりは早稲田に進学した。「自序」には登場しないが、この米沢出身には河上清（1873 - 1949）がいる。田村と河上は青山学院に進学した。河上は田村がアメリカに出発する際に見送りに来ており、その後、田村の尽力で河上もまたアメリカ留学を実現し、アイオアで再会することとなる。河上は社会主義者として、国際ジャーナリストとして知られるが、河上の半生をまとめた古森義久『嵐に書く　日米半世紀を生きたジャーナリスト』(毎日新聞社、1987年3月／講談社、

1990 年 11 月）の中には田村の記述もある。田村と河上は青山学院時代の友人であり、田村の留学中には手紙のやりとりもあった。

田村は一八九六（明治二十九年）春に、青山学院を終えたあと、アメリカ、アイオワ州立アイオワ大学に留学していた。清はこの田村にときどき、手紙を送り、アメリカの様子を尋ねたり、留学の方法について問い合わせたりしていた。自分の書いた本や新聞記事なども送っていた。やがていつかは実現させたいアメリカ留学計画のための準備だった[15]。

（3）本文からわかる留学の経緯

全体の内容については目次で三八まで項目があげられているが、ここではすべてを取り上げないが、「一　吾が外遊前の奮闘」では、出身が米沢であること、決して裕福な家庭の育ちではないことから、かなりの努力家であったことが伺える。

そは予が十歳の折であつた。夫れより種々の困難と辛惨とを経験したが、当時燃ゆるが如き予の一念は、緩慢な方法に依るを欲せず、遂に小学校を半ばにして、受験の上、直に中学校に入った[16]。

今では考えられないことだ。学資を工面しながら彼が読んでいたものが紹介されている。

当時予が座右の愛読書としては、有名なるフランクリンの自叙伝及物理学者チンダルの伝記の写本であつた[17]。

田村は 1883 年 3 月 15 日に故郷を後にして東京へ向かった。当時は米沢から福島の間に鉄道がなく、徒歩で移動したことも書かれている。東京に来ると、青山学院に入ったことが紹介されている[18]。さらに驚くべきことにアメリカの学者の数学書を読み、そこに誤りを見つけると手紙を書いたともある。

然るに、其頃、予は米国の数学者で、アイオワ州立大学の教授なるウエルド氏の著、デトルミナンと云ふ数学書を読んで研究して居たのだが、或日不図した事から書中に誤謬を発見し、早速これを同教授の許に注意して遣つた處、幾千もなくして同教授から手紙が来た、読んで見れば、自分の大学へ来る気はないかと云ふ事だ[19]。

すべての逸話等を紹介することは紙面上不可能なため、ここで終わりとするが、彼の人となりがわかるものだ。

留学中の田村の様子を簡単に時系列で紹介しておきたい。

1898年5月20日	アイオワ州立大学に到着。大歓迎を受ける[20]。
1990年春頃	アイオワ州立大学卒業2，3ケ月前にウッドワード博士よりコロンビア大学の数理物理学の特待研究生（Fellow）に推薦される[21]。
1900 年初夏	アイオワ州立大学数学科を卒業。「卒業論文は弦線論といふので、音楽に関係あるものだが、勿論取るに足らないものである」[22]。
1900年秋	アイオワを9月に去り、ニューヨークのコロンビア大学へ[23]
1902年晩春	心臓病となり、ニュージャージー州のオーシャンシティで半年間静養。
1902年9月	博士論文を書き上げる直前の9月20日に火災に逢い、これまでの資料や書籍、論文原稿が焼失[24]。火災後、ニューイングランド輯のウースターに行き、クラーク大学に入る[25]。エール大学（イエール大学）のギッブス教授に研究上の相談[26]。
1903年夏	ワシントンの中央気象台に入る[27]。
1905年	コロンビア大学より博士の学位を授与される[28]。

田村の外遊自体は1906年までである。古森義久『嵐に書く　日米半世紀を生きたジャーナリスト』(1990) では田村のまとまった記述を紹介しておくこととする。それは田村の留学の経緯、アメリカでの彼の業績である。

田村は清より三歳年下だったが、アメリカでは先輩である。日本で数学を勉強しているとき、たまたまアイオワ大学のウェルド教授が書いた数学書を読んでいて、誤りを発見した。さっそくウェルド教授にミスを指摘する手紙を送ったところ、教授から届いた感謝の手紙には奨学金を出すからアイオワ大学で勉強しないかというすすめが書かれていた。

田村は旅費を自分で稼いで渡米したのだが、横浜からの出発には清も見送りにでかけている。

久しぶりに清と会う田村はそれまで長い間、日本語を使っていなかったので、はじめは会話につまずいていたが、勉学や日常生活に必要なこまごまとした注意を懇切に教えてくれた。

だが田村はすでにアイオワ大学の数学科を卒業しており、ニューヨークのコロンビア大学の大学院課程に特待生として招かれていた。だから清がアイオワシティに着いてから二週間たらずで東部へと去っていった。

その後の田村はコロンビア大で地球物理学を専攻して博士号をとり、二十六歳でワシントン中央気象台に専門官として採用されている。アメリカの連邦政府機関に勤務したはじめての日本人の一人であろう。

田村はさらにワシントンのカーネギー研究時に招かれ、地球磁気を研究し、アメリカ

の学界でも高く評価された。一九〇六年（明治三十九年）、三十歳で日本に帰り、海軍大学の教授に迎えられたが、三年後、腸チフスで急死している。

専門分野こそ地味だったが、田村もまた明治という時代を全力で疾走しつづけた青年である。アメリカでは特に清以上のめざましいスピードで実績を着々と重ねていった。田村のこの活躍はアメリカでの清に大きな励みとなっている(29)。

本稿の目的が明治時代のハロウィンの紹介であるため、田村の留学の紹介はここまでとし、以降は実際のハロウィンに関する記述内容を取り上げる。

3　「一六　米国男女学生の社交」

『外遊九年』でハロウィンについて取り上げているのは２箇所である。最初に出て来るのがこの「一六　米国男女学生の社交」である。冒頭は次のように始まる。

> 米国大学に入り、日本人として最初異様に感ずる事は、男女学生の交際の非常に自由なことである(30)。

田村に限らず当時の日本人がアメリカで見聞きすることはまさにカルチャーショックの連続であったことは想像がつくところだ。しかし、田村は表面的なものではなく、かなり男女間の交際の注意点も捉えていた。

> 日本に於いては、男の間では、勿論のこと奥様、お嬢様と呼はるゝ女の前でも、何に憚らず卑猥な談話をする、女子の方でも、平然（？）として聞かぬ振りでも聞いて居る。米国で、卑猥な話、卑陋な行でもしたら最後で、死刑の宣告を受けたも同然である。永い間親密に交際し、月下に腕を組んで逍遙する間柄でも、卑猥卑陋の言語を弄することは出来ない。米国で日本人が不評判になるのは、多くこんな失敗から起る(31)。

時代が変わっても日本人男性の本質は変わっていないのかもしれない。興味深い観察眼である。

ハロウィンに関する記述は最後のパラグラフに登場する。

> 男女学生の交際は大抵夜に於いてされるのであるが、米国には、社交の為めに使用されるトラデショナルの日もある。其の重な日は十月三十一日のハロウ＋ーン、Hallowe'en 夫れから二月十四日のワレンテン St.Valentaines day 二月廿一日のワシントン誕生日等だる。此等の日は日本の節句といふ様な日で、若き男女相会して仮面会を開くもある。舞踏会を開くもある。また、学校にはレシエプション Reception とか、セニア、ダンス（卒業する級の舞踏会）など毎年開かれて、男女学生間の社交は仲々盛なものである(32)。

ハロウィンは男女の交際の場として紹介されていることは興味深い。同様にバレンタインデーも紹介されているが、これもかなり早い紹介かもしれない。いづれにしても宗教的な祝いの日としてではなく、「社交の為めに使用されるトラデショナルの日」としてとらえた田村の着眼点は、アメリカの若者の実態を捉えるとともに、異文化に触れた当時の日本人の理解であったということだ。

4　「二〇　ハロウィーンの奇習　男女学生の社交機関」

「一六　米国男女学生の社交」ではハロウィンを「社交の為めに使用されるトラデショナルの日」として紹介していたが、田村はここではバレンタインデーについては単独で取り上げられていないが、ハロウィンのことについては単独で取り上げていることは興味深い。目次では「ハロウィン」、本文中の項目では「ハロウィーン」、本文中ではハロウィーンの表記が多いが、「ハロウィン」の表記が混在している。ここではそのまま引用する。本文は４つのパラグラフで構成されている。

第１パラグラフ

何月何日はどんな物を食べる日だ、何月何日はどんなことをする日だといふ様に、昔から宗教的な伝説的な記念日は何れの国にもある。西洋に於いては St.Valentaine's day, Palm Sunday, Easter Sunday, Good Friday、ハロウィーン、クリスマスなどといふ様な記念日が沢山ある。其の中クリスマス、エースターなどは宗教的の日で、日本の基督教信徒間にも守られて居るが、ワレンテンやハロウィーンなどといふ日は、日本の人は知つて居ない。併し西洋殊に米国に於いては青年男女等が喜び遊ぶ日となつて居るから、予は玆にハロウィーンに付て話して置かう[33]。

第１パラグラフから読み取れることは次の３点になろう。

1　留学生活を通してアメリカの習慣を理解し、記念日などについても把握していた。
2　田村は東京の青山学院で学生時代を過ごしており、その中でもバレンタインデーとハロウィンについてはアメリカで知った可能性が高いこと。
3　バレンタインデーとハロウィンが「青年男女等が喜び遊ぶ日」、すなわち、若者が楽しむ日としてしっかり認識していること。

記念日の中でも Palm Sunday と Good Friday は他に比べると馴染みが薄いため補足しておきたい。 Palm Sunday は The Lord's Entry into Jerusalem とも言われる。イエス・キリストが十字架にはりつけとなり亡くなって三日後に復活した出来事の一週間前に、エルサレムへ入城した記念日を指す。Good Friday は聖金曜日と呼ばれ、復活祭前の金曜日のこと。イエス・キリストの受難と死を記念する日である

第2パラグラフ

幾百年前から言ひ伝へて居ることか知れないが、毎年の十一月一日を以て諸神の日即ち All saints day として置くのだ。昔は特別な祭典でも行つたものだらうが、基督教が伝播した今日では勿論そんなことは行なはない。其の前夜即ち十月三十一日の夜をハロウィーン Hallowe'en 或いは Halloweven と称する、一説に此のハロウィーンと云ふ語は Hallow Eve といふ語から転化したともある。それで此の夜は、鬼神妖怪の類が到る處に横行して悪戯を演ずる晩だと傳へられてる、蘇国の百姓詩人として知られたロバート、バーンズの詩中にも種々のハロウィーン怪談が載せてある。米国の田舎に於ては、十月三十一日の夜が来ると、柵が倒れて居たり、大きな材木が道路の眞中に横つて居つたり、こちらの家の荷車は隣家の屋敷にあつたりする。勿論文明国に鬼神妖怪などの出る筈はないが、如何に開化した国でも悪戯小僧は居る、こゝに悪戯小僧というても悪少年のことを云うて居るのではない。ハロウィーンには此の小僧等が出て悪戯をするのだ、男女学生等の間にも種々の喜戯を演ずる。若い女などが其の晩外出るすると、男に頬を撫でられたりことがある、勿論それ以下の悪戯はない、又女が大勢男装して道路をあるいて居ることもある。ハロウィーンの晩丈けは道徳上の罪とならぬ限り、社会も法律も大目に見て許して置くのである[34]。

第2パラグラフから読み取れることは次の5点になろう。

1　11月31日の All Saint's Day の前夜、10月31日をハロウィーンと呼ぶ。Hallowe'en 或いは Halloweven と称すること、また、Hallow Eve といふ語から転じたものかもしれないことを紹介。
2　10月31日の夜は鬼神妖怪の類が至る所に横行して悪戯をすること。
3　スコットランドの詩人ロバート・バーンズの詩の中にもハロウィーンが取り上げられていること。
4　男女学生（若者）はハロウィーンでは皆悪戯をし、女が男装していることがあること。
5　ハロウィーンの晩は道徳上に罪にならなければ、社会も法律も大目に見てくれること。

第3パラグラフ

米国は男女老幼に拘わらず、すべてのドツト笑ひ崩れる様な罪もない害もない遊戯や冗談即ち Fun を非常に好むのだ。日本人の眼から見れば、實に小供らしい、つまらんことを米国の男女が楽しんでいる。何故そんな下らぬことをするのだと問ふならば、彼等は Just for fun と答へる。これは米国人が口癖の様にいふ語である。ハロウィーンの晩にも米国人殊に青年男女はハロウィーン夜会 Halloween party を開いて、種々の喜戯を演じたり、御馳走を食べながら笑ひ興じたりするのだ、予も今こそは、学者だなだという

済し込んで居るが、米国に居つた頃は、随分こんな夜会で面白ろ可笑く騒いだものだ。ハロウィーン夜会でよくやる遊戯は、大きな林檎を盥の水に浮かして手を用ひないで林檎を食べた者は、幸福が来るとか、二口食べると自分の思ふ人と結婚出来るかと笑ひ興ずる様なこと、夫れから林檎を天井から糸でつるして同様の遊びもする。火中に胡桃を投じ、其の胡桃が漸々燃いて灰になれば、其の人は幸福、胡桃は躍ねて外に飛んで仕舞へば其の人は幸福ではない。指輪、指套、十銭銀貨、鍵などを入れて菓子を拵へ、之れを分配する、而して指輪の這入っている菓子を取つた者は、自分の好きな人と結婚出来る、指套の這入つた菓子に当つた者は裁縫師になる、十銭銀貨の入つてる菓子を取つた者は富貴になる、鍵の這入つている菓子を食べたものはすべての人の心を此の鍵で開けることが出来るのだなどと言つて遊ぶのだ。ハロウィン会で遊ぶのは皆こんな種類であるが、如何に米国人だとて男子けでは面白くない、矢張こんな遊戯も、男女一處にするから喜戯になるのである。又ハロウィーンの晩には、日本では行ふ怪談会の様なともすることがある。アイオワに居つた頃、予の経験した中に、こんな会合があつた。南瓜の中を刳り、外からいろ〳〵な穴をあけて、鬼の面や、恐ろしい面を拵へて、其の南瓜の内に燭火を入れるのだ、こんなものを澤山庭や眞暗な室内に飾るから、随分物悽くみえる、夫れから男女会衆怖はい仮面などを被つて、怪談などをする。終りには仮面を脱し、室内を輝かして御馳走を食し散会するのである。其の他仮想舞踏会もハロウィーンに開かれることがある、即ち男はヂョルジ・ワシントンの仮装をしたり、フランクリンの仮装をしたり、女は昔の女王に扮装たり昔の偉らい女に扮装したりして、大勢会合して舞踏するが、これも仲々面白いものた[35]。

第３パラグラフから読み取れることは次の５点になろう。

1　アメリカ人気質に言及し、アメリカ人は老若男女皆、冗談などが好きなこと。
2　ハロウィーンでは夜にパーティを開き、楽しい遊びや御馳走を食べ楽しむ。楽しい遊びには次のようなものがある。
　（1）　林檎を盥の水に浮かす、林檎を天井から糸で吊るして、手を使わずに食べ、それによって占いめいたことすること。
　（2）　火の中に胡桃を入れ、その胡桃の燃え方や状態で占いめいたことすること。
　（3）指輪、指套、銀貨、鍵をお菓子の中に入れ、どのお菓子を取ったかで占いめいたことをすること。
　（4）南瓜（かぼちゃ）をくりぬき、恐ろしい鬼（悪魔）の面をつくり、南瓜の中に蝋燭の火をともし、室内を装飾すること。
　（5）仮面などを被って、怪談話などをすること。
　（6）室内を輝かして、御馳走を食べること。
　（7）仮装舞踏会を開く。偉人の仮装をすること。

第４パラグラフ

女子大学殊にウエレスレー、スミス、ワッサーなどのハロウィーン夜会は頗る盛んなもので、茶番狂言、だんまり狂言、幽霊踊り、仮装行列などといふことをする。ハロウィーン喜戯は地方によつて差異あるが、青年男女に男女学生の社交機関となつて居ること、米国を通して同様である[36]。

第4パラグラフから読み取れることは次の2点になろう。

1　ウエレスレーとはウェズリアン大学（Wesleyan University）、スミスはスミス大学（Smith College）、ワッサーはヴァッサー大学（Vassar College）、の3つの女子大学ではハロウィーンの夜会、仮装行列などが盛んに行われたこと。
2　ハロウィーン喜戯は男女学生の社交の機会となっていて、アメリカ中で行われていること。

田村が留学中に同じ都市に留まらず、アメリカ中を移動していたことが彼の見聞を広めていたのだろう。

5　田村の捉えたハロウィン

田村は『外遊九年』(1908)では「一六　米国男女学生の社交」と「二〇　ハロウィーンの奇習　男女学生の社交機関」の2箇所でハロウィンについて取り上げていた。項目名から分かるように、田村が注目していることは「男女学生の社交」である。その一つの機会がハロウィンであり、そのハロウィンがどのようなもので、どんなことをするのかを端的に記している。

第1点のハロウィンがどのようなものであるかは第1パラグラフ及び第2パラグラフで解説している。

田村はワレンテル（バレンタインデー）とハロウィーンは日本人がまだ知らないものとして取り上げている。ハロウィーンの解説についても現在のものとほとんど変わらない。例として現在の「ハロウィン」の定義及び説明を2つほど紹介しておきたい。

1つ目はタッド・トレジャ／北村弘文訳『アメリカ風俗・慣習・伝統事典』(1992）では次のような説明がある。

サムヘインの祭りは、古代ケルト人の新年の祭りで、この時期には人間や動物のいけにえが死者のサーマンと呼ばれる主や太陽にささげられた。11月1日に祝われるサムヘインの祭りは、こんにちの万聖節の前夜祭（ハローウィン）の原型である。しかし、同時に現代の祭日は中世の聖職者、とくに8世紀に11月1日をキリスト教の聖人の祭日に選定した法王グレゴリオ3世の影響を反映したものでもある。ただ現在われわれが10月31日に祝うのは、万聖節の前夜祭、すなわち「ハローウィン」としてである。

この日に示される魔女や死者に魅せられた状態は、異教とキリスト教両方の祭日に逆

上ることができるが、「いたずらかお菓子か」という世俗的な慣習も、おそらくそうであろう。

ロバート・マイアーズは、死者にご馳走をささげた後、「死者の魂を象徴する仮面と時代衣裳を着けた村人たちが郊外までパレードして亡霊たちを外へ連れ出す」サムヘインの祭りがこの習慣の源だとしている。

キリスト教徒のその後の貢献は聖人の遺品が展示されたり、教区民たちがそれぞれ好きな聖人の衣裳を着けたりして行われた中世の万聖節の行列の中に見られる(37)。

２つ目は荒このみ監修『[新版] アメリカを知る事典』(2012)の岡田康男「ハローウィーン」には以下のような説明がある。

10月31日の夜に行われる年中行事。古代ケルト人のサムハイン Samhain 祭が起源といわれる。これは死の神サムハインをたたえ、新しい年と冬を迎える祭りで、この日の夜には死者の魂が家に帰ると信じられた。キリスト教の伝播にともない、この祭りはキリスト教にとりこまれ、諸聖人の祝日である万聖節（11月1日）の前夜として位置付けられた。Hallow とはアングロ・サクソン語で＜聖徒 saint＞を意味し、All Hallows Even（万聖節前夜祭）がつづまって＜Halloween＞となった。今日ではアメリカ合衆国の子どもの祭りとして有名である。アメリカでは、この夜のため、大きなカボチャをくり抜き、目鼻口をつけた提灯 jack-o'-lantern を作り、窓際に飾っておく。学校では仮装パーティなどが開かれるが、夜になると景物、魔女、海賊などに仮装した子どもたちが、隣近所の家々を回ってごちそうしないと、いたずらをするぞ＜Trick or treat!＞と言いながら、チョコレートやキャンディをせびっていく(38)。

田村が触れていないとすれば、ハロウィン起源がヨーロッパのケルト文化に由来することぐらいだろう。田村はまさに留学中に知ったアメリカのハロウィンの見聞を記したのだろう。

第２点のハロウィンではどんなことをするのかについては第２パラグラフから第４パラグラフまで書かれている。現在日本で行われている一般的なハロウィンと言えば、仮装（コスプレ）とジャック・オー・ランタンを飾る、Trick or treat を含め子どもにお菓子を配ることぐらいだろうか。田村が説明している林檎、胡桃の遊戯はほとんど行われていない。ハロウィンを説明している前述の２つの書籍はアメリカの様子を扱ったものであるがそこにも林檎、胡桃の遊戯については取り上げられていない。安東伸介・小池滋・出口保夫・船戸英夫編『イギリスの生活と文化事典』（研究社出版、1982年12月）の「ハロウィーンの遊戯（Hallowe'en Games）を見ると次のような解説が掲載されている。

キリスト教以前に遡る古い行事であるから、さまざまな遊びが、新しい年の運を占うために催された。その遊びの種類からハロウィーン前夜祭のことを、Nutcrack Night, Crab Apple Night とか Apple and Candle Night などと呼ぶことがある。バーンズ

(Robert Burns) は「ハロウィーン」('Hallowe'en') という詩の中で、くるみを火をにくべて吉凶を占う習慣を伝えている。水を入れた樽に浮いているリンゴを、手に用いずに口で加える遊びもある。水の中に沈んでいる coin を首をつっ込んで (ducking) 取り上げる遊びもある。しかしイングランドでは、この祭りの習慣は Guy Fawkes' Day に吸収されてしまった。かぶらちょうちん (turnip-lantern) の行列は、死者の再々を意味し、一方悪霊から身を守るためでもあった。サマセット (Somerset) 州やウェィルズ地方では、このちょうちんを 10 月 31 日に門先に吊るして、悪霊から家を守るという習慣が残っている [39]。

また、チャールズ・カイトリー／澁谷勉訳『イギリス祭事・民俗事典』(大修館書店、1992 年 10 月) でも次ぎのように説明されている。

ハロウィーンは、また、1 年の境目にあたることから、新しい年の運勢を占うにふさわしい時期でもある。昔は真夜中に教会の入り口に立って、村人達の霊が 1 列になって境内を通って行くのを見つめていれば、次の 1 年間の誰が死ぬ運命にあるかがわかると信じられていた。しかし、この俗信を現在も信じて実行している人はいないかもしれないが、ハロウィーンのパーティーでは、余興として数多くの「占い遊び」'divination rites' が、面白半分に今でも楽しまれている。その中で最も人気が高いのが「りんぐくわえ」'bob-apple' と称するゲームであって、まず初めにりんごを水に浮かべるか、あるいは紐に吊るす。参加者はそのりんごを口だけを使ってくわえ取ってから、途切れないように皮をむき、その長い渦巻き状の皮を左肩越しに投げる。すると落ちた皮が本当に好きな人の頭文字に似た形になるという。同じようによく行われる恋占いの遊びでは、恋人同士を表す 2 個の木の実かりんごの種子が用いられ、それを暖炉内に寄り添うように並べておく。スコットランドとイングランド北部地方では、両者が仲良く静かに燃えれば結婚にゴールインできるが、もし「音を立てて跳ね上がった」りすれば、2 人の愛はやがては破局を迎えるとされている [40]。

イングランドでは反対になるという。これはイギリスでのことだが、イギリス国内でも少しづつ変化していることを考えると、アメリカにこの習慣が伝わり、時間の経過とともに変容したとしても不思議な話ではないだろう。

さらに、田村の記載の中で注目しておきたいのが、スコットランドの詩人ロバート・バーンズ (Robert Burns, 1759-1796)の詩に言及していることだ。"Auld Lang Syne" の歌詞を整えたのがバーンズである。この詩は日本では『蛍の光』として歌われているものだ。このバーンズには "Halloween" (1785)という詩がある。田村が文中で述べている「蘇国の百姓詩人として知られたロバート、バーンズの詩」[41] とはこの詩のことである。ただし、詩を引用しての紹介はなく、その内容については「ハロウィーンの怪談が載せてある」[42] とだけ記している。

6　明治のロバート・バーンズの受容状況

（1）田村哲のロバート・バーンズの意義とは

田村哲が 1898 年に留学したが、それまでのバーンズの日本における受容を知る手がかりとして難波利夫『日本におけるロバート・バーンズ書誌』（文唱堂、1977 年 5 月）を見ておきたい。同書によれば明治時代における文献では 60 で、1898 年 7 月までのものはわずかに 19 である。ちなみに紹介の最初については以下のような文献が掲載されている。

明治 12 年

1.「薄児尼斯」（ケースト著）橋爪貫一（訳）『西国立志編列伝』六合書房　1 月 (43)

明治 12 年は 1879 年である。書誌にはいくつかの段階があり、ロバート・バーンズに関して言えば、第 1 にバーンズの紹介、第 2 に彼の作品の紹介、第 3 に彼の作品の翻訳が基本的には扱う内容となろう。

特に受容初期において見受けられることとしては、名前、作品名だけが文中に言及される場合がある。バーンズの場合には英米文学に関する資料を優先して調査することになるが、これ以外にも当然言及されることがある。奇しくもこの田村哲『外遊九年』は難波利夫『日本におけるロバート・バーンズ書誌』では紹介されていない。もし掲載されていれば、48 番目となる。ちなみに、難波利夫がその後発表した「明治におけるバーンズ流入」（『英学史研究』第 15 号、1983 年）でも田村について取り上げられていない。しかし、明治 12 年以前のバーンズの初期の受容については以下のような記述がある。

尚、中村正直は、『西国立志編』を、明治 4 年に出版したが、『真実の心腸』と題して、詩人バーンズの人となりを紹介して以て、少年に人の道を教えた一章がある (44)。

バーンズの表記は「培尼斯」である。田村がいつバーンズのことを知ったのかは『外遊九年』だけではわらかないが、バーンズという詩人の名前だけでなく、“Halloween”という詩を知っていたことは注目に値することだろう。

（2）バーンズの “Halloween”

詩のタイトル自体が“Halloween”となっているため、当然ハロウィンのことを謳ったものである。その中でも田村がハロウィンの遊戯について触れていたが、その部分がバーンズの詩の中ではどのように描かれているのかを部分的に紹介しておきたい。

Some merry, friendly, country-folks,
Together did convene,
To burn their nits, and pou their stocks,
And haud their Halloween

Fu' blithe that night [45].
田舎の親しい連中が
　楽しそうに集まり、
手にしたクルミを焼き、キャベツの茎を抜き、
　万聖節の前夜祭を大いに楽しむのは、
　　その夜のことだった[46]。

The auld guidwife's well-hoordit nits,
Are round and round divided,
And monie lads' and lasses' fates
Are there that night decided:
Some kindle coothie, side by side,
And burn thegither trimly;
Some start awa, wi' saucy pride,
And jump out-owre the chimlie
Fu' high that night [47].
年取ったおかみさんの大事なクルミが
　ぐるりぐるりと、配られる、
それで若者や娘たちの運命が、
　その夜その場で決められるというわけ。
仲良く並んで火がついて、
　ちゃんと一緒に燃え上がる。
威張り出しゃばり偉そうに、
　炉端から跳び出してきて、
　　ものすごく高く跳ぶやつが出て来るのは、その夜のことだった[48]。

田村は林檎、胡桃が占いとして使用されていることを記していた。バーンズの詩の中では胡桃が占いとして使用していることが描写されているが、キャベツの描写もある。こうした占いについては藤高邦宏「英米文化の背景　英米人の迷信・俗信考（17）Ⅳ　年中行事—その6　初穂祭・収穫感謝祭・万聖節の前夜祭・火薬陰謀事件記念日・アメリカの感謝祭」（『倉敷芸術科学大学紀要』第14号、2009年3月）でも紹介されている。

なお、バーンズのこの詩についてはLisa Morton. *The Halloween Encylcopedia* (2003) では次のように述べている。

His 28-stanza poem "Halloween," written in 1785 documents the fortune-telling traditions and party customs of eighteen-century Scottish villagers; it tells the sometimes amusing, sometimes bawdy, and sometimes frightening stories of a group of young people gathered together for the evening. Burns grew up on a farm himlsef

(his father was a largely-unsuccessful farmer, and his brother, Gilbert, carried on the family tradition; Burns himself worked as a farmer and an excise-man), and so Burns had probably experienced such a Halloween gathering himself [49].

バーンズの詩は 18 世紀のスコットランドのハロウィン占いを描いている。

7　ハロウィンの占い

田村が描くハロウィン、バーンズが描いたハロウィンでは特にハロウィン占いを中心にした遊戯が描かれていた。*Lisa Morton. Trick or treat: a history of halloween* (2012)ではバーンズの詩について次のようにまず指摘している。

It's impossible to pinpoint exactly when fortune-telling games became an integral part of Halloween festivities; most later accounts of them simply refer back to the Burns poem, which suggests that fortune-telling rituals were already well-established and linked to Halloween [50].

占いがハロウィーンの祝祭の重要な一部となったのがいつのことなのか、ピンポイントで示すことは不可能であり、のちの説明のほとんどもバーンズの詩に遡って言及するばかりである。バーンズの詩によれば、占いの習わしは当時すでに確立され、ハロウィーンに欠かせないものとなっていたようだ[51]。

ではどのような位置付けにあったのだろうか。

The vast majority of these fortune-tellilng games were dedicated to learning the nature of one's future spouse—either by name, character or profession—since marriage was probably the most important event in the life of a rural, pre-industrial young person. These rituals, so idelibly described by Burns and carried down all the way to the early twentieth century, undoutbtedly left a romantic mark on Halloween forver [52].

占いゲームは大部分が将来の伴侶がどんな人か、その名前や性格、職業を知るために行われた。産業化以前の田舎に暮らす若い人たちにとって、結婚はおそらく人生で最大のイベントであると見なされていたのだろう。占いの習わしはバーンズによってあまりに克明に詠われ、20 世紀初頭までずっと伝えられてきた結果、まちがいなく、ハロウィーンにロマンチックな痕跡を半永久的に残した[53]。

田村がまさに「男女学生の社交」と表現していたが、田村が留学していたアメリカにもこの風習が残っていたことになる。田村もハロウィン遊戯については前述の通り記載しており、少なくても田村が留学していたアメリカでも林檎や胡桃の占いが行われていた。Lisa

Morton. *The Halloween Encylcopedia* (2003)によれば、このハロウィンの占いについて次のように述べている。

> Fortune-telling or divination was, up until the mid-twentieth century, one of the most popular aspects of Halloween. The popular fortune-telling on Halloween is often ascribed to its beginnings as SAMHAIN, the CELTS' New Years' celebration, when it was thought that the boroders between this world the Otherworld were down, and as such divination was possible on this night. Although fortune-telling (especially those customs involving love and romance) was practiced on other days as well (including ST.AGNES' EVE, MIDSUMMER'S EVE and even CHRISTMAS), there were more and a wider variety of customs practiced on Halloweens past than any other day of the year [54].

現代のように娯楽が氾濫する時代とは異なり、昔はそこに集まる若者を引き付ける要因としてハロウィンの占いが大きな役割を果たしていたのはでないかとも考えられる。

エピローグ

日本にいつハロウィンが受容されたかを特定することはできないが、田村哲『外遊九年』（1908）は大きなヒントを残している。日本文化には外来の習慣が根付き、新しく年中行事として定着したものがある。クリスマス、バレンタインデーなどはその典型だ。ハロウィンもこの仲間入りをしたと言ってよいだろう。しかし、その在り方には問題もある。田村がアメリカで知ったハロウィンでは「男女学生の社交」の機会であり、若者にはつきもの羽目を外す行為もこの時期に起きたていたようだ。あえて、「社交の為めに使用されるトラデショナルの日」[55]、「ハロウィーンの晩丈けは道徳上の罪とならぬ限り、社会も法律も大目に見て許して置くのである」[56] と記していることは、現在の日本のハロウィンを思い浮かべてみると印象的である。

アメリカは日常の学校生活が厳しいことから、若者の馬鹿騒ぎがある程度容認される日がある。その日の一つがハロウィンであるということだ。現在の日本のハロウィンはハロウィンの占いの部分は全く欠如し、一種コスプレに特化されていると言ってもよいかもしれない。仮装を超え、もうコスプレ[57] となっているのだ。明治時代のアメリカでもやはりハロウィンの日には町が荒れることを田村は記していた。

> 米国の田舎に於ては、十月三十一日の夜が来ると、柵が倒れて居たり、大きな材木が道路の眞中に横つて居つたり、こちらの家の荷車は隣家の屋敷にあつたりする[58]。

時代は変わろうと、それがどの国であろうと、ハロウィンの日は荒れるのだ。問題は集約すれば2点となろう。第1点は若者がどうして荒れるのか、第2点は大人、社会はこれを

どうとらえるのかである。この問題もおそらく昔も今あまり大きな変化はないではないか。すわなち、若者は学校という社会を圧縮した狭い世界で大きなストレスを受けていること。仮に就職していても、閉塞感のようなものを強く感じているかもしれない。大人・社会はある一定のところまで容認するが、容認する境目を大人・社会自体も決めることに躊躇し、若者はその境目に関係なく行動をエスカレートさせる傾向にあるのではないだろうか。明治時代のアメリカとは言え、「道徳上の罪」にならなければ社会から容認されるが、法律に触れるとなれば、社会は容認しないということになる。日本の場合には宗教的な背景を持たないイベント化の傾向もあり、アメリカとは事情が異なる。

田村の『外遊九年』は明治という時期に日本でほとんど知られていなかったハロウィンのことを記したこと、その中でスコットランドの詩人ロバート・バーンズに触れたことはバーンズ受容でもあまり紹介されていないものであったことだ。外遊の成果を発表したことにより、21 世紀の現在でもこれを基に日本のハロウィン受容の一助となったのだ。

注

(1) 筆者が発表してきたハロウィン関係の論文等。以下以外にテレビ出演してコメントも述べているが、活字でないためここでは取り上げていない。また、単行本の中で項目として設けて発表しているものもあるが、ほとんど、下記のものが初出となっているため、それも割愛する。

「ポップカルチャーとしてのハロウィン」(『武蔵野学院大学日本総合研究所研究紀要』第 13 輯、武蔵野学院大学日本総合研究所、2016 年 3 月)、1 - 6 頁。

「主催者なし、ステージのような魔力　渋谷ハロウィーン　マナー守って」　(『東京新聞』2018 年 10 月 31 日朝刊第 22 面にコメントあり)

「渋谷のハロウィンとスクランブル交差点」(『むさおさ』第 30 号、むらおさ同人会、2019 年 7 月)、8-20 頁。

「渋谷ハロウィンから見えるもの」(『日欧比較文化研究』第 23 号、日欧比較文化研究会、2019 年 10 月)、51-68 頁。

「日本ハロウィン受容小史」(『武蔵野学院大学日本総合研究所研究紀要』第 17 輯、武蔵野学院大学、2020 年 3 月) (2019 年 10 月に入稿済)

(2) 堀井憲一郎『愛と狂瀾のメリークリスマス　なぜ異教徒の祭典が日本化したのか』(講談社、2017 年 10 月)、82-85 頁。

(3) 筆者が出版したシェイクスピア書誌・上演年表は以下の通りである。

『日本のシェイクスピア』(エルピス、1988 年 2 月)

『日本シェイクスピア総覧』(エルピス、1990 年 4 月)

『日本シェイクスピア総覧 2』(エルピス、1995 年 4 月)

『シェイクスピア研究資料集成』(別巻 1・別巻 2) (日本図書センター、1998 年 6 月)

『CD-ROM 版日本シェイクスピア総覧』(エルピス、2005 年 3 月)

『日本シェイクスピア研究書誌 (江戸時代編)』(イーコン、2013 年 12 月)

『日本シェイクスピア研究書誌（平成編)(増補版)』（イーコン、2014 年 10 月）
『日本シェイクスピア劇上演年表』（多生堂、2015 年 9 月）
『日本シェイクスピア劇上演年表（増補改訂版)』（多生堂、2016 年 4 月）

(4) 佐々木隆「『シェイクスピア』勢ぞろい」(『日本経済新聞』)、1990 年 5 月 9 日朝刊。

(5) 佐々木隆「私のシェイクスピア捜し」(『知識』第 6 巻第 6 号、1990 年 8 月)、174-175 頁。

(6) 佐々木隆「『日本シェイクスピア総覧』」(『書誌索引展望』第 16 巻第 1 号、1992 年 2 月)、12-18 頁。

(7) 金尾種次郎『川上音二郎欧米漫遊記』（金尾文淵堂、1901 年 2 月）
(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/858212)(2019 年 11 月 18 日アクセス)

(8) 田村哲『外遊九年』（目黒書店、1908 年 11 月）
(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/761032)（2019 年 11 月 18 日アクセス）

(9) 国立国会図書館の検索結果掲載内容。
(https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I000000423840-00)(2019 年 11 月 22 日アクセス)

(10) 田村哲『外遊九年』、 p. 1 .（自序）

(11) Ditto.

(12) Ditto.

(13) Ibid., p.4.（自序）

(14) Ibid., p.5.（自序）

(15) 古森義久義久『嵐に書く　日米半世紀を生きたジャーナリスト』（講談社、1990 年 11 月)、p.107.

(16) 田村哲『外遊九年』、p.2.（本文）

(17) Ditto.

(18) Ibid., p.3.（本文）

(19) Ibid., pp.5-6.（本文）

(20) Ibid., p.17.（本文）

(21) Ibid., pp.22-23.（本文）

(22) Ibid., p.22.（本文）

(23) Ibid., p.28.（本文）

(24) Ibid., p.36.（本文）

(25) Ibid., p.37.（本文）

(26) Ibid., p.41.（本文）

(27) Ibid., p.44.（本文）

(28) Ibid., p.48.（本文）

(29) 古森義久『嵐に書く　日米半世紀を生きたジャーナリスト』、pp.125-126.

(30) 田村哲『外遊九年』、p.123.（本文）

(31) Ibid., p.125.（本文）

(32) Ibid., p.130. (本文)
(33) Ibid., pp.154-155. (本文)
(34) Ibid., pp.155-156. (本文)
(35) Ibid., pp.156-157. (本文)
(36) Ibid, p.159. (本文)
(37) タッド・トレジャ／北村弘文訳『アメリカ風俗・慣習・伝統事典』(北星堂書店、1992年3月)、pp.273-274.
(38) 岡田康男「ハローウィーン」(荒このみ監修『[新版] アメリカを知る事典』平凡社、2012年4月)、p.492.
(39) 船戸英夫編『イギリスの生活と文化事典』(研究社出版、1982年12月)、p.285.
(40) チャールズ・カイトリー／澁谷勉訳『イギリス祭事・民俗事典』(大修館書店、1992年10月)、pp.185-186.
(41) 田村哲『外遊九年』、p.155. (本文)
(42) Ditto.
(43) 難波利夫『日本におけるロバート・バーンズ書誌』(文唱堂、1977年5月)、p.3.
(44) 難波利夫「明治におけるバーンズ流入」(『英学史研究』第15号、1983年)、p.126.
(45) Robert Burns. "Halloween" (https://poets.org/poem/halloween) (2019年12月1日アクセス)
(46) ロバート・バーンズ研究会編訳『ロバート・バーンズ詩集』(国文社、2002年10月)、p.103.
(47) Robert Burns. "Halloween" (https://poets.org/poem/halloween) (2019年12月1日アクセス)
(48) ロバート・バーンズ研究会編訳『ロバート・バーンズ詩集』、pp.105-106.
(49) Lisa Morton. *The Halloween Encylcopedia* (McFarland & Company, 2003), pp.30-31.
(50) Lisa Morton. *Trick or treat: a history of halloween* (Peaktion Books, 2012), p.37.
(51) リサ・モートン／大久保庸子訳『ハロウィーンの文化誌』(原書房、2014年8月)、p.47.
(52) Lisa Morton. *Trick or treat: a history of Halloween.* p.37.
(53) リサ・モートン／大久保庸子訳『ハロウィーンの文化誌』、pp.47-48.
(54) Lisa Morton. *The Halloween Encylcopedia*, p.75.
(55) 田村哲『外遊九年』、p.130. (本文)
(56) Ibid., p.160.
(57) 佐々木隆「ポップカルチャーとしてのハロウィン」、p.3.
(58) 田村哲『外遊九年』、p.156. (本文)

※引用においては内容に支障がない限り、現代カナ遣い一部改めた。また。筆者は「ハロウィン」と表記しているが、田村哲は「ハロウィーン」と表記しているため引用等の場

合には原著に拠る。

キーワード：ハロウィン、田村哲、仮装、社交、占い